

# 杉並ユネスコ協会会報

153号

2024年  
12月20日

Suginami UNESCO Association News Letter

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、  
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

ユネスコ憲章前文より

- 心の中に平和の守りを固めよう
- すべての人間の尊厳を重んじよう
- 教育・科学・文化の発展に努めよう
- 民族間の疑惑と不信をのぞこう
- 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう



杉並ユネスコ協会

## 目次

ユネスコのつどい「ビキニ水爆実験とは」.....2	ユネスコ教室.....6
カンボジアの地雷除去の現場を訪ねて.....4	中学生クラブ.....7
科学教室／料理教室.....5	全国大会／関東ブロック／活動予定.....8

# 70年前を 忘れない

## ビキニ水爆実験

1954年3月1日、アメリカによるビキニ環礁での  
巨大な水爆実験(ブラボー実験)でできた、直径約  
2キロメートル、深さ約60メートルのクレーター  
(撮影 豊崎博光)



# ビキニ水爆実験とは 日本と世界への影響

9月29日(日) セッション杉並 第8・9・10 集会室

初めに日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞を心から喜びたいと思います。ノルウェー・ノーベル委員会は、「被爆者は、考えようがないものを私たちが考えることを、核兵器がもたらす理解を超えた苦痛と苦悩を理解することを助けてくれる」とし、被爆者の証言により核兵器の使用は道徳的に受け入れがたいという「核のタブー」が成立したことを称えました。そして「核のタブー」が圧力にさらされている今、この授賞は「被爆者の経験とメッセージを伝え続ける新しい世代」を励ますためでもあると語られたのです。

杉並ユネスコ協会は、杉並光友会の被爆者の方々とともに、核なき未来を目指した取り組みを続けてきました。今回の「ユネスコのつどい」もその一つです。とりわけ第二部では、1954年に杉並から始まった原水爆禁止署名運動が56年の被団協結成に繋がったことも語られました。その2週間後に届いた受賞の報せは、杉並区民にとってとりわけうれしいことでした。

本シンポには約100名の方々が参加され、最後まで熱心に耳を傾けてくださいました。

## 第一部 講演「ビキニ水爆実験とは 日本と世界への影響」

### 1954年のビキニ水爆実験で意図的に被ばくさせられたマーシャルの人々

第一部はマーシャルの人々に長期にわたり寄り添ってこられた豊崎博光さんにお話を伺う予定でしたがご病気のため、共に活動されてこられた第五福竜丸展示館の市田真理さんに話していただきました。豊崎さんを師匠と仰ぐ市田さんは、豊崎さんの講演の映像や氏が撮られた貴重な写真を紹介しながら、ユーモアを交えつつ氏の思いを伝えてくださいました。

その内容は衝撃的なものでした。この水爆実験の中で米軍は、核戦争における兵士への影響を調べるために「被ばくした人間の反応研究」というプロジェクトをひそかに行っていたのです。ロンゲラップ島の住民236名を避難と称して別の島に移送し、そこで被ばくさせたのです。その後1957年になって米軍は、ロンゲラップ島の除染が完了したとして住民165名を帰島させるのですが、毎年米国から来た医者は検査のみで治療しませんでした。そして島民には甲状腺障害や出産異常が増え続けました。ロンゲラップに住めないと気づいた島民は、85年に再び故郷を捨て、190km離れた島に移住します。



1985年5月、ロンゲラップ島の人びとは放射能から逃れるために故郷の島から避難した。(撮影 豊崎博光)

それから39年経つ今も、島民は故郷ロンゲラップに帰れないままです。今もビキニ環礁には水爆がサンゴ礁をえぐった深さ60m、直径2kmの大クレーターがあります。エニウェトク環礁には汚染物質を入れて蓋をした円形の巨大なドームがあります。海面上昇で水没すればまた大変な汚染が生じかねません。

講演の中で市田さんは、ビキニ水爆実験では第五福竜丸以外の多くの漁船も被ばくし、今も裁判が続いていることも話されました。

最後に、ミクロネシア憲法前文のすてきな言葉を私たちに伝えてくださいました。「海は我々を分かちつものではなく一つにしてくれる。

戦争を知ったが故に我々は平和を守る。分割されたが故に統一を望む。支配されたが故に自由を求める。ミクロネシアの歴史は筏やカヌーに乗って海を探検した時に始まった。ミクロネシアの民族は星空の下をくぐった時に始まった。世界は一つの海なのだ。」

マーシャルの人々に多くを教わり託されたと語る豊崎さんは、この海はマーシャルにつながっている、第五福竜丸は今も航海中、と市田さんに語られたそうです。市田さんは最後にユネスコ憲章にふれ、私自身にとっての「平和の砦」は第五福竜丸であり、「第五福竜丸は核のない未来に向かって今も航海中です。皆さんもこの航海をご一緒に」と呼び掛けられて講演を締めくくられました。(理事 小寺隆幸)

シンポ全体はYouTubeでご覧になれます。  
<https://www.youtube.com/watch?v=aTAYm4hHdUg>



## 第二部 パネルディスカッション「杉並から始まった原水爆禁止署名運動」

第一部のビキニ水爆実験の講演に関連して、第二部では、原水爆禁止署名運動について、ゆかりのある方々から報告をしていただきました。1955年8月6日の第1回原水爆禁止世界大会へと発展した経緯について理解を深めるパネルディスカッションでした。パネリストは、杉並区和田で鮮魚店を営んでいた菅原健一・トミ子ご夫妻の6女の竹内ひで子さん、杉並区立公民館の館長であった安井郁さんを義父にもつ安井節子さん、杉並区の社会教育に長く関わり、民間ユネスコ活動に携わっている林美紀子さん、そして第一部の演者である市田真理さんの4人。司会は、杉並ユネスコ協会理事 小寺隆幸さん。

竹内さんからは、1954年3月ビキニ水爆実験による放射能汚染のニュースが流れ、マグロのみならず魚介類全体が売れなくなった漁業関係者の困窮状況の報告がありました。その被害に対して、戦前に労働運動に取り組んだ活動家のご両親は、杉並魚商水爆被害対策協議会を立ち上げ、水爆実験反対と漁業関係への補償の要求の活動を実行したとのこと。菅原トミ子さんも、杉並婦人団体協議会の講演会の場で署名協力の依頼をし、杉並の女性団体を動かしました。ご両親は、日頃から都内の漁業仲間や地域との繋がりが強く、その結果迅速な運動の立ち上げ・進行になったとのこと。

安井さんからは、杉並区の署名運動が全国的署名へと広がったその経緯が紹介されました。1953年から安井館長が主宰した主婦による社会科学の本の読書会「杉の子会」や、館長が呼びかけた杉並婦人団体連絡協議会のほか、他団体や個人などが集まり、1954年5月9日に水爆

禁止署名運動杉並協議会が結成され、行政と市民が一体となった署名運動が繰り広げられました。8月には原水爆禁止全国協議会が結成されます。これは全国で別々に行われている署名運動を統合し、世界に原水爆禁止を訴えることが目的でした。署名用紙の代わりに専用の署名数報告用紙を全国に配布。そして、杉並協議会が発表した杉並アピールの趣旨と3つのスローガン「水爆禁止のために全国民が署名しましょう」「世界各国の政府と国民に訴えましょう」「人類の生命と幸福を守りましょう」に賛同した署名が、全国から続々と送られてきました。署名数は公民館館長室でまとめて集計され、1955年の世界大会開催に結実したということです。

林さんは、過去のことを知る大切さから、「1941年から1955年にかけて、原水爆禁止署名運動と年表」の資料を作成し配布してくださいました。資料により、第二次世界大戦の後半から原爆開発が行われていたこと、広島・長崎への原爆投下、ビキニ環礁などでの米・ソ連による原爆や水爆の実験、世界的な原水爆禁止運動などを把握することができました。また、杉並の水爆禁止署名運動の発足やその後の全国的展開には、杉並区が社会教育機能を目的とした公民館設置を進めたことや、戦争をくぐりぬけた女性たちの活発な活動や協力が大きかったとのことでした。

(署名数)

1954年6月 杉並区約26.5万筆(区民人口の約68%)  
1955年9月 全国約3,259万筆(15歳以上人口の約6割)

(顧問 朝倉洋子)

### 参加者の感想(アンケートより抜粋)

- ◆とにかく初めて知ることばかりでした。未だにビキニ事件が終わっていないこと、ビキニの島民が一旦帰島したのに、また出て行かざるをえないことは大変ショックでした。もっと知らなくてははいけないし、核兵器のない世の中を目指して、頑張らなくてははいけない。
- ◆市田さんの講演が、豊崎博光さんが乗り移ったかのように、内容をよく伝えてくださった。最後の言葉「海は続いている」「航海中」が胸にひびいた。汚染、除染の島々は日本の3.11の福島と繋がり、食糧だけでなく文化も破壊されるとつくづく思った。署名運動の実態がよく分かり、とても良かった。
- ◆市田さんの話がとても分かりやすく聞きやすかったです。あっという間の90分間。おっしゃられていた

とおり、もっともっと若い世代にも知ってもらいたい内容です。本当にありがとうございました!

- ◆母が長崎被爆、僕はその2世です。“ヒバクシャ”運動に関わってきました。そのような関係から、1954年の署名運動に深く関心があり、大学時代から杉並の原水協運動や、1987年には9条の会に参加してきました。1954年の署名活動は反核運動の原点に近い活動であり、反戦平和の戦いを継続していく必要があります。
- ◆杉並の読書会「杉の子会」発足の経過はとても感動しました。文化が社会を創るという理念や理想を持った政治リーダーシップ、市民社会を築き上げることが、これから特に大切なことだと、改めて教育・文化の重要性を感じました。



# カンボジアの地雷除去の現場を訪ねて



理事 小寺隆幸



8月にピースボートによるカンボジアの地雷除去活動見学ツアーに参加しました。カンボジアは1970年から89年まで戦火にさらされました。米軍はベトナム戦争での補給ルートをつたために東部を猛爆撃し、多数の子爆弾が飛散するクラスター弾も大量に投下しました。75年にベトナム戦争が終結すると、カンボジアを支配したポル・ポト政権は国民の4分の1を虐殺する恐怖政治を行いました。そこに軍事介入したベトナム軍も交えた内戦中、両軍は大量の地雷をばらまきました。89年の和平合意と1年間の国連統治（代表：明石康）を経て戦火は収まりましたが、農作業を行っていた人々や子どもたちが地雷や不発弾で負傷・死亡する被害が続発しました。そこで92年に国際社会も支援してカンボジア地雷対策センター CMAC が設立され、地雷除去を進めてきたのです。

ピースボートは98年から地雷除去100円キャンペーンを実施し、その募金で地雷や不発弾1000個を除去し、地雷原そばの4つの小学校の校舎と保健所1棟を建設・寄贈しました。今回の参加者の半数は地雷募金に取り組んできた若者たちでした。

私たちはカンボジア北西部のシエムリアップ市に滞在し、地雷博物館やキリングフィールドを見学した翌日、悪路を3時間走って地雷が残る地域に行き、CMACの活動を見学しました。今は火薬のにおいに反応するよう訓練した犬や大型ネズミも活躍しています。ドクロマークで示された地雷原の内部を発信器を付けた探知犬が何度も往復し、PCの地図に行跡が示されます。犬が火薬を感知しなければ職員が慎重に草を刈り、金属探知機で丁寧に調べ、火薬を含まない爆弾の破片などを掘り出し

ます。全て除去し、安全を確認してようやく数mの幅で安全地帯を広げるとい根気のいる作業です。犬は地雷を踏んでも爆発しませんが、探知犬導入前には作業中に地雷を踏み殉職した職員も多くいました。その犠牲の上に、近い将来地雷が完全に除去されそうだと嬉しい報告をお聞きしました。その後ピースボートが支援する2つの小学校を訪ねました。子どもたちは笑顔で迎えてくれました。

翌日、世界遺産アンコールワット一帯を歩きました。長い間森に埋もれていたアンコールトムが印象的でした。写真のように今は自然と共生した形で保存されていますが、将来どう維持するかが課題だとお聞きしました。

10月に杉並区立富士見丘小学校で平和について話す機会をいただきました。ガザで活動するUNRWAの清田明宏保健局長など、子どもを守ろうと今日も必死で取り組む人々のことを話しました。その上で、戦争が早く終わってほしいが終わればすぐ平和になるだろうかと問いかけると、子どもたちから水・食料・住居の問題と共に地雷・不発弾の危険も出ました。そこでカンボジアで見たことを映像を交えて話し、また偶然前の週にNHKが放映した「新プロジェクトX プノンペンに奇跡 希望の水道」の一コマも見せました。北九州市の水道局職員の自主的努力でカンボジアの子どもたちがきれいな水を飲めるようになったのです。

戦争は今も続いています。それでも国境を越えて、人と人がつながり平和を創り出す努力が行われていることに子どもたちが希望を感じてくれたらと願っています。



ピースボートが支援する小学校



アンコールトム

## ユネスコ 科学教室 ハーブを使って謎の粉の正体を調べよう！

8月25日(日) セシオン杉並 工芸室

今回のユネスコ科学教室のテーマは、「ハーブを使って謎の粉の正体を調べよう！」でした。講師の先生は、ジャパンハーブソサエティの理事をなさっている飯塚知子先生。

工芸室に入ると、テーブルには5つの紙コップに入っている粉、粉、粉……。真っ白い粉もあれば灰色の粉もある。さらさらしていたり粒々していたり様々。「何の粉だろう？」と思わず匂いを嗅いでみたりするが、わからない。

飯塚先生が今回用意してくださったハーブは、「バタフライピー」と「マロウ」。「バタフライピー」とはマメ科の植物チョウマメの花びらで色はブルー、「マロウ」はアオイ科の紫色の花びらで、どちらも水につけると美しい青色や紫色に染まります。

このブルーや薄紫色の水を、粉の入った紙コップの中に入れてかき混ぜるとあら不思議、ピンク色の水に変化するもの、より青が際立つものと変化をします。

ここまで来て、昔むかし子どもだった頃に学校でリトマス試験紙を使った理科の実験を思い出しました。このブルーの成分はアントシアニンが含まれていることを、

実験の後で先生より教えていただきました。酸性ならば赤っぽく、アルカリ性ならば青っぽくなり変化を楽しみました。コップに入っていた粉は、クエン酸・岩塩・重曹・砂糖・灰でした。

お隣さん同士、おしゃべりしたり確認しながらの実験。懐かしく楽しいひと時を過ごすことができました。

参加者からは「庭にハーブを植えたので、ハーブのことをもっと詳しく知りたいと思い、参加しました」「毎年紫蘇ジュースを作っていますが、クエン酸を入れると紫蘇液がぱっときれいな赤紫色に変化するの、アントシアニンとクエン酸が反応したためと、改めて実感しました」などの感想が聞かれました。

ハーブは日常の中で何気なく使っていましたが、それぞれに効能もあり、それらは昔から料理や薬としても利用されていたようです。

今回、飯塚先生には準備の段階から大変ご尽力いただきました。当日も分かりやすい丁寧なご説明をいただき、改めて「ハーブの力」を感じた科学教室でした。

飯塚先生、参加者の皆様、ありがとうございました。  
(会長 佐藤直子)



## ユネスコ 料理教室 料理からウクライナに思いを馳せる

11月16日(土) 高井戸地域区民センター 料理室

今年度の料理教室は、ウクライナ人のナタリアさんとヴィクトリヤさんを講師にお招きして母国の伝統的な家庭料理を教えてくださいました。

メニューは、①ボルシチ、②グリチャーニキ（そばの実入りハンバーグ）、③クランベリー入りコールスロー、④ウズワル（ドライフルーツを煮たジュース）。

ウクライナのソウルフード「ボルシチ」は、2022年7月にユネスコの「緊急保護が必要な無形文化遺産」として登録されました。

ボルシチのレシピは日本の味噌汁のように家庭の数ほどあると言われています。今回は鶏肉やほうれん草を使った「緑のボルシチ」でした。他のお料理も野菜やフルーツをふんだんに使い、ヘルシーでとても美味でした。

講師のお二方は、ヴィシヴァンカという細かいウクライナ刺繍をほどこしたブラウスを着用されていて、料理実習後は、ウクライナの歌を何曲か披露してくださいました。また、ウクライナで最も愛されている昔話「わらのうし」を紙芝居で紹介してくださいました。2022年2月24日に始まったロシア侵攻によるウクライナの現状のお話もされました。



料理室のコーナーにはヴィクトリヤさんが作ったクリスマスの飾り物デイドック（藁などで作ったもの）や伝統的な衣装なども展示されました。

終了後のアンケートには、「歌や民話、民族衣装など文化に触れることができ興味深かった」「料理が美味しかった」「母国が戦争のただ中にあり、ミサイルが飛んでくる話などもあり、考えさせられた」「ウクライナのことを忘れてはいけない」「戦争の早期終結を願う」などの声が寄せられました。(理事 水上あつ子)





# 世界にふれる夏 2024 ユネスコ教室

## INTERNATIONAL SUMMER PROGRAM

夏のユネスコ教室は、私たち杉並ユネスコ協会青年部の一年間の活動における、最大といっても過言ではないイベントです。61回目となる今年度は、5年ぶりに宿泊という形で開催することができました。1泊2日の宿泊に加えセッション杉並で3日間、例年訪問させていただいている「JICA 地球ひろば」の見学の計6日間にわたり実施しました。

8月3日、猛暑のなか中学生や外国人がセッション杉並に集まりました。今回のユネスコ教室は例年と比較し中学生の人数が少なかったこともあり、初日であるこの日は中学生の緊張している様子がうかがえました。初日は開級式を行いました。6日間を共に過ごす青年部や外国人の紹介、今後のスケジュールの説明、今年度加入した1年目の青年部によるユネスコ紹介を行った後、全員で今年のキャンプダンスを踊る際に使用するポンポン作りをしました。ポンポンが完成すると、まずは全員で「マツケンサンバ」を踊りました。中学生から青年部、OBやOG、理事の方々までが馴染みのある歌と踊りに、外国人たちも楽しく見よう見まねで踊ってくれました。続いて今年度のキャンプソングである「デイドリーム・ビリーバー」に加え、同様にしおりに歌詞を記載していた「なんとなく」「Stand by me」も歌いました。ギター之音に揺れながら歌う中学生や外国人からは緊張はだいぶ消え、リラックスした表情が見られました。

開級式の翌日からは、埼玉県の名栗げんきプラザでの1泊2日のキャンプでした。初めて訪れる場所に、青年部も正直不安を少し抱えていました。到着し昼食をいただいた後は、プラネタリウムの見学をしました。言語の壁を超えて外国人たちも楽しめている様子でした。プラネタリウムでの勉強を終えると、室内レクを行いました。室内レクは、イントロドン・気配斬り・ビンゴの

8月3日	8月4~5日	8月6日	8月7日	8月8日
開級式	宿泊学習	スポーツ大会	閉級式	JICA訪問
セッション杉並	埼玉県立名栗げんきプラザ	セッション杉並	セッション杉並	JICA地球ひろば

参加 中学生 6名 外国人 7名 青年部 18名 理事他 8名

3本立てのプランでした。走って解答権を獲得するイントロドンや、各班2人ずつの計8人の総当たりで戦う気配斬りで身体を存分に動かし、盛り上がることができました。ビンゴでは、日本語で数字が発表された際に、中学生が班の外国人に数字を英語で一生懸命教えている姿が見受けられ、着実に仲が深まっていることが伝わりました。

夕食を終えると、宿泊ならではのキャンプファイヤーを実施しました。幸運なことに天気にも恵まれ、夏の夜の一大イベントとなりました。前日に皆で作ったポンポンを持ちキャンプファイヤーを囲って「マツケンサンバ」を踊ったり、ギター之音に乗せて皆で歌を歌ったりと、非日常を存分に味わいました。その後は有志の青年部や外国人による歌やダンスなどのパフォーマンス披露を行いました。あらためて歌やダンスは言語の壁を超えて皆で楽しめるものなのだと実感しました。

夜が明け、宿泊2日目は名栗げんきプラザの飯盒炊爨のプログラムを利用させていただきました。班によって食材の切り方や役割分担の方法が異なり、出来上がったカレーに少しずつ違いが見られました。ここでも中学生が積極的に外国人と交流をとっている場面が多くありました。

大きな怪我もなく無事に宿泊を終え、4日目となった8月6日はセッション杉並でスポーツ大会を行いました。この日は日本人の割合が宿泊時より増えましたが、「英語でフルーツバスケット」ではしっかりと英語を積極的に使いながらゲームを進行することができました。昨年と同じく体育室を使用したため、部屋の形を活かした「パン食い競争」なども行いました。スポーツは歌やダンスと同様に、言語の壁を簡単に超えて外国人と楽しめるものです。

翌8月7日は、セッション杉並での閉級式でした。翌日もユネスコ教室は続きましたが一度セッション杉並とお別れをしよう、といった意味での閉級式です。事前に青年部で用意してきたこれまでの4日間のスライドショーの放映や、翌日に訪問する「JICA 地球ひろば」についての事前学習、しおりへの寄せ書きなどを行い、これまでを振り返りながら皆で会話を楽しみ、ゆったりとした時間を過ごしました。今回は参加者が少なかったため、班の枠を超えて参加者全員から寄せ書きをもらっている中学生もいました。これほど全員が仲良くできるのは人数が少ない今年ならではの利点だと感じました。

最終日は市ヶ谷にある「JICA 地球ひろば」への訪問です。例年伺わせていただいておりますが、昼食をいただいたのは5年ぶりでした。エスニックなお弁当をいただき、日本文化との違いを実感できました。

私自身、キャンプ長は初めてでしたが、ユネスコ教室自体はこれまで中学生として一度、青年部として二度参

加してきました。5年前、中学一年生で初めて参加したのが、コロナ禍前に宿泊で行えた最後のユネスコ教室の年でした。そのため、宿泊を経験したことがない青年部が半数以上であり、場所も日数もこれまでとは異なるという状況で、形になるまでは不安と緊張の日々でした。5年前の記憶や記録を頼りにしながらも今年の青年部らしさを追求し、今回のプログラムが出来上がりました。私の不安とは裏腹に中学生や外国人は非常に積極性があり、企画でも想像以上に声を上げてくれたおかげでスムーズに進行し、青年部からも楽しかったとの声が多く上がりました。私自身、この夏は思い出となっただけでなくキャンプ長という未知への挑戦により自分自身も人間として成長できたと感じています。開催にあたりご尽力くださったすべての方々へ心より感謝申し上げます。青年部は引き続き今後も活動して参りますので、温かく見守っていただけますと幸いです。

(青年部部長 田村紗依)

### UNESCO Junior High School Club

## 中学生クラブ

国際理解と英会話

September ニューージーランド



October 東京ジャーミイ訪問



November イギリス





## 第80回日本ユネスコ運動全国大会 in 新居浜

2024年11月23日(土) リーガロイヤルホテル新居浜

日本ユネスコ運動全国大会が愛媛県新居浜市で開催されました。杉並ユネスコ協会の参加者は8名でした。

日本の三大銅山の一つ「別子銅山」のある新居浜は、まさに銅山の開発・発展と共にあり、四国屈指の工業都市として発展してきました。記念講演では、講師の末岡照啓氏（住友資料館顧問、元広瀬歴史記念館名誉館長）より、「SDGsの先進事例から学ぶ——別子銅山の環境対策から新居浜港 CNP へ」と題する興味深いお話をお聞きしました。お話を伺うまでは、銅山＝環境汚染と思っていましたが、銅山を運営する住友企業と労働者側が共に環境保全に正面から取り組み、地域全体を豊かにする活動が行われていたとのことで、目から鱗でした。

その後、市内の各学校からユネスコ活動の実践発表がありました（新居浜市では27の全ての小・中学校がユネスコスクールに認定されています）。

愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部	別子銅山の歴史を学習する中で、現代にも通用する環境保全対策を学び、歴史と文化の継承を行っている。また、地域のユネスコ協会と繋がり、新居浜ユネスコ協会青年部としても活動を行っている。
新居浜市立多喜浜小学校	多喜浜の地では300年前から塩田開発が行われていた。現在は行われておらず、残された道具から学校で塩づくり体験を行っている。
新居浜市立惣開小学校	地域の自然を守る活動をカリキュラム化して、学年ごとに取り組みを行っている。
新居浜市立船木中学校	近くの川に準絶滅危惧種であるニホンイシガメが生息しており、それを保護する「カメ活動」を各学年で行っている。

発表を聞いて、地域にしっかりと根を張った活動がなされていることに感動しました。実践発表の中で一人の生徒が「私たちは先人の築いた未来の中で生活をしています。今度は私たちがしっかりと未来を作っていきます」と話してくれた言葉が心に残りました。（会長 佐藤直子）



## 関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 茨城

2024年10月12日(土) つくば国際大学

2024年度の関ブロは、SDGsの目標達成に関する講演（富田敬子 常磐大学・短期大学学長）と3つの分科会（SDGs、平和・交流、遺産活動）を中心に行われました。分科会では、杉ユ協のメンバーも参加しているミンガラバー・ユネスコクラブより、ミャンマーをめぐる国内外での活動状況と今後の支援のあり方について報告がありました。2021年のクーデター以降、軍政が続くミャンマーにおいて、寺子屋等を通じた教育支援の重要性や、ミャンマーと日本の相互理解・交流のさらなる活性化が望まれるとの指摘がなされました。（理事 岩野智）



### 編集後記

2024年は、日常が世界に直結していることを痛感した一年でした。気候変動、戦争や紛争による影響は、直接、家計への打撃として表れました。一方で、滞在期間が3ヶ月を超える在留外国人が急増し、6月には358万人を突破しています。少子高齢社会の筆頭を走る私たちは、海外からの人達といかに共存していくか大きな転換期にあると感じています。（副会長 西野裕代）

杉並ユネスコ協会会報 153号 2024年12月20日発行

発行者 杉並ユネスコ協会 会長 佐藤直子

事務局 〒167-0043 東京都杉並区上荻 2-34-10 山田正方

TEL 090-6105-6633 FAX 03-3399-0339 E-mail suginami@unesco.or.jp

編集 杉並ユネスコ協会広報担当

口座 ゆうちょ銀行/記号10040 番号18974381 (ゆうちょ銀行間での振込)

店名〇〇八(ゼロゼロハチ) 店番008 番号1897438 (他行からの振込)

みずほ銀行/荻窪支店 普通口座 番号4047995

ホームページ <http://suginami-unesco.org/>

## 活動予定

### 12月 December

- 6日(金) 理事会
- 11日(水) 平和のためのポスターコンクール表彰式
- 21日(土) 中学生クラブ (イヤーエンドパーティー)
- 27日(金)~ 韓国スタディツアー
- 30日(月) (青年部)

### 2025年1月 January

- 10日(金) 理事会
- 11日(土) 中学生クラブ (英会話と日本文化・落語)
- 26日(日) 杉並ユネスコ協会新年会

### 2月 February

- 7日(金) 理事会
- 8日(土) 中学生クラブ (英会話と国際理解)
- 23日(日) 東京都ユネスコ連絡協議会研修会

### 3月 March

- 2日(日) 科学教室
- 7日(金) 理事会
- 15日(土)又 中学生クラブ
- は16日(日) (3年生を送る会)
- 26日(水)~ 広島スタディツアー
- 29日(土) (青年部)

杉並ユネスコ合唱団練習 ※は予定

- 12月12日(木) 1月9日(木)
- 1月23日(木) 2月13日(木)
- 2月27日(木) 3月13日(木)※
- 3月27日(木)※